

退院支援事例をアセスメントする学習を取り入れた成人看護学実習の効果

室田昌子¹⁾、岩脇陽子¹⁾、滝下幸栄¹⁾、山本容子¹⁾、光本かおり²⁾、中村順子²⁾、松岡知子¹⁾

1) 京都府立医科大学医学部看護学科

2) 京都府立医科大学附属病院看護部

Effects of the Adult Nursing Science Training that Adopted the Assessment of Hospital Discharge Support Examples

Masako Murota¹⁾, Yoko Iwawaki¹⁾, Yukie Takishita¹⁾, Yoko Yamamoto¹⁾,
Kaori Mitsumoto²⁾, Junko Nakamura²⁾, Tomoko Matsuoka¹⁾

1) School of Nursing, Kyoto Prefectural University of Medicine

2) Division of Nursing, University Hospital, Kyoto Prefectural University of Medicine

要約

看護基礎教育の段階から在宅ケア推進に向けてのアセスメントを学ぶ実習を組み立てることは重要である。そこで、在宅ケア推進に向けた効果的な教育方法の試みとして、成人看護学実習で学生が担当した患者の退院支援についてアセスメントする学習を地域医療連携室見学実習の中で取り入れたので、その効果を報告する。

対象者は学士課程3年生および4年生81名。調査項目は、属性として性別、年齢をたずねた。また、実習目標5項目、患者の退院支援について3項目、地域医療連携室について3項目、地域医療連携室の看護への興味、見学実習の学習効果について5件法(とても、まあまあ、どちらでもない、あまり、まったく)でたずねた。

62名を分析の対象とした(有効回答率76.5%)。対象者の平均年齢は21.2±0.6歳、女性93.5%、男性6.5%であった。実習目標5項目、患者の退院支援について3項目、地域医療連携室について3項目、地域医療連携室の看護への興味についての項目において実習後が実習前に比べて有意に高値を示した。見学実習の学習効果については「(とても・まあまあ)よい」が96.8%で、退院支援について具体的にイメージでき、患者の退院支援の方法を具体的にでき、地域医療連携室の役割について理解できたとしていた。以上より、退院支援事例をアセスメントする学習を取り入れた成人看護学実習は効果的であることが示唆された。

キーワード：退院支援、在宅ケア、教育効果、アセスメント、成人看護学実習

I. はじめに

医療技術の進歩、医療法の改正に基づく医療提供体制の整備により、入院医療でしか行えなかった高度な治療ケアが外来や在宅で行われるようになってきている¹⁾。2016年の一般病床での平均在院日数は16.2日と、前年よりさらに0.3日短縮しており²⁾、医療処置やケアが必要な状態で退院し、通院医療・在宅医療へと移行する患者が増加している。また、団塊の世代(約800万人)が75歳以上となる2025年以降は、国民の医療や介護の需要が、さらに増加することが見込まれており、厚生労働省は、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制

(地域包括ケアシステム)の構築を推進している³⁾。療養の場が「医療機関から暮らしの場へ」移行する中、高齢化や世帯構成の変化により、独居や老老介護など、在宅への移行に困難を伴う患者が増加し、退院支援のあり方が課題となっており⁴⁾、病棟看護師には、入院時から退院に向けてのアセスメントを実施し、必要な退院支援に結び付けていく能力が求められている²⁾。

看護学士課程においては、看護基礎教育における退院支援の取り組みの報告はいくつかなされているが^{2) 4)}、退院支援を看護学実習でアセスメントする取り組みはほとんど見られない。4年生を対象にした地域での暮らしを見据えた研究では、在宅ケアの魅力が挙げられる一方、退院支援に対するイメージがしにく

いことや、実習では退院支援をアセスメントするまで到達しないとの報告もある⁵⁾。病院から療養の場が移行する際の退院支援について、より実践的な教育を行うことが求められている⁴⁾。

A 大学での成人慢性期看護学実習では、退院支援を要する患者を担当することが多い。看護基礎教育の段階から在宅ケア推進に向けてアセスメントの視点を学習できる実習を組み立てることは重要である。そこで、在宅ケア推進に向けた効果的な教育方法の試みとして、実習で学生が担当した患者への退院支援についてアセスメントする学習を取り入れたので、その実習の効果を報告する。

II. 本実習の目的と目標および概要

1. 成人慢性期看護学実習までに退院支援について学ぶ機会 (図1)

A 大学成人看護学領域の科目構成は、成人急性期看護学と成人慢性期看護学で展開されている。成人慢性期看護学は、1年生担当科目として成人看護学概論(2単位30時間)、2年生担当科目として成人慢性期看護援助論Ⅰ(1単位30時間)・Ⅱ(1単位30時間)、3・4年生担当科目として成人慢性期看護学実習(3単位135時間)で構成されている。成人慢性期看護援助論Ⅰでは「慢性期疾患をもつ患者の地域への継続看護」のテーマで、地域医療連携室の看護師長と退院調整看護

師による講義と紙上事例を用いた退院支援アセスメントの演習を2時間行っている。

2. 成人慢性期看護学実習の位置づけ (図1)

成人慢性期看護学実習は3・4年生の担当科目として3単位135時間実施している。この実習では、既知の知識、技術を基盤として、成人期にある患者を総合的に理解し、患者および家族に健康障害に応じた看護が実践できることを目標に、入院患者を担当し、看護過程を展開する。また、透析センター、外来化学療法センター、地域医療連携室における見学実習を行い、学生が総合的に学べるように実習を組み立てている。

3. 地域医療連携室における見学実習について

1) 見学実習の目的

本見学実習の目的は、「地域医療連携室見学実習を通して、在宅療養に向けた継続看護の実際について学ぶ」である。

2) 地域医療連携室見学実習の目標

見学実習の目標は「地域医療連携室の役割について述べられる」「特定機能病院における地域医療連携室の特徴を理解できる」「在宅療養に必要な社会資源について理解できる」「慢性期または終末期にある対象者とその家族の抱える在宅療養上の問題について考えることができる」である。

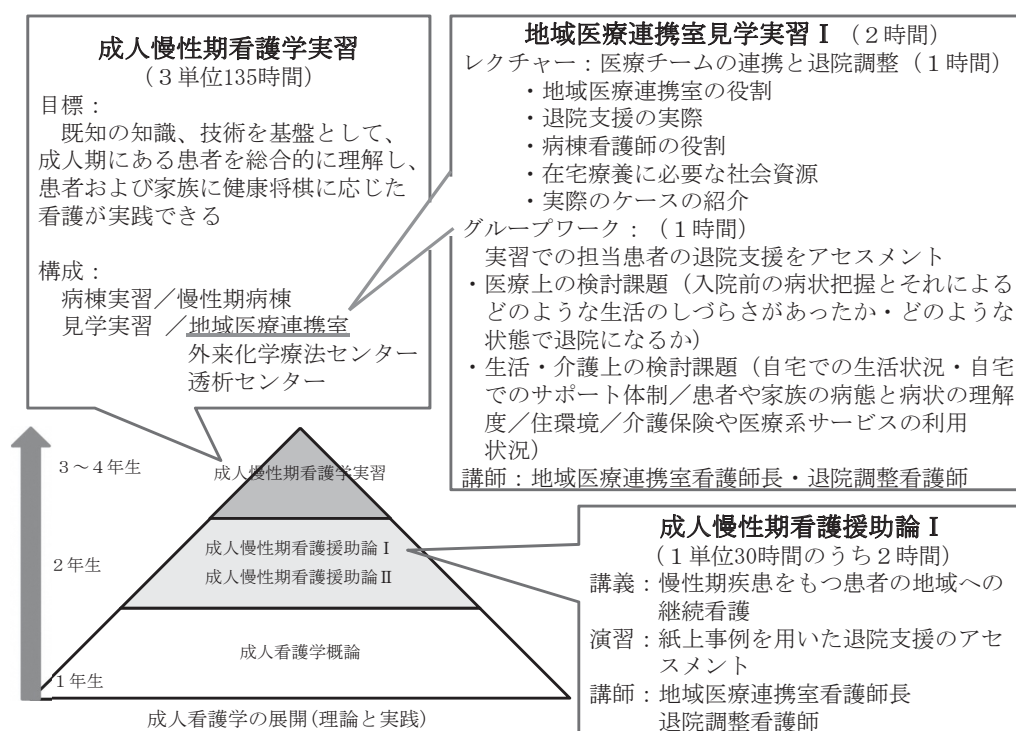


図1 地域医療連携室における見学実習の展開

3) 地域医療連携室見学実習の展開 (図1)

見学実習は特定機能病院 (A 病院) で実施した。

入退院センターの見学、レクチャー、グループ発表と討議とし、2時間で構成している。学生は事前に「退院支援の必要性のアセスメント用紙 (A4 1枚)」に沿ってグループで話し合い、前日に退院調整看護師に提出しておく。退院支援の必要性のアセスメントの項目は、基本情報、医療上の課題 (入院前の病状とそれによるどのような生活のしづらさがあったか/どのような状態で退院になるか)、生活・介護上の課題 (自宅での生活状況/自宅でのサポート体制/患者や家族の病態と病状の理解度/住環境/介護保険や医療系サービスの利用状況) である。

レクチャーは「医療チームの連携と退院調整」について地域医療連携室看護師長および退院調整看護師から受ける。内容は「地域医療連携室の役割」「退院支援の実際」「病棟看護師の役割」「在宅療養に必要な社会資源」「実際のケースの紹介」である。その後、実習で担当している患者2名 (各病棟1名ずつ) について学生が発表し、グループ討議した後、必要な退院支援について退院調整看護師から退院支援の必要性のアセスメント項目に沿って助言を受ける。

なお、成人慢性期看護学実習2病棟、12名 (各病棟6名) の学生が参加し、合計7回開催した。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査時期 2016年10月～2017年6月

2. 調査対象者 学士課程3年および4年生81名

3. 調査方法

「退院支援の必要性のアセスメント用紙」の記入前と本見学実習の後に自己記入式の調査票を配布し回収した。

4. 調査項目

調査項目は、属性として性別、年齢をたずねた。また、実習目標5項目、患者の退院支援について3項目、地域医療連携室について3項目、地域医療連携室の看護への興味、見学実習の学習効果について5件法 (とても、まあまあ、どちらでもない、あまり、まったく) でたずねた。また、臨床の専門家による教育方法について効果的であった点を自由記述で求めた。

5. 分析方法

調査項目については SPSS Statistics 21 を用いて基本統計量を算出した。実習目標、患者の退院支援について、地域医療連携室について、見学実習の学習効果、地域医療連携室の看護への興味については、「とても5点、まあまあ4点、どちらでもない3点、あまり2点、まったく1点」で点数化し、データが正規分布しないことを考慮して、Wilcoxon の符号付き順位検定を用いて前後の比較を行った。自由記述は意味の類似性に基づいて分類した。

6. 倫理的配慮

研究参加は任意であること、成績には関係しないこと、匿名性の保持を口頭と書面で説明し、文書による同意を得て行った。

Ⅳ. 結果

同意が得られた72名中 (回答率88.9%) そのうち未記入の項目があった回答を除いた62名を分析の対象とした (有効回答率76.5%)。

1. 対象者の年齢と性別

対象者の平均年齢は 21.2 ± 0.6 歳、女性93.5%、男性6.5%であった。

2. 実習目標 (表1)

1) 問題の抽出と解決に向けた退院支援・調整についての理解

見学実習前は、中央値 (四分位範囲) 3.0 (2.0-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -6.133, p = 0.00$)。

2) 患者に必要な社会資源の活用についての理解

見学実習前は、中央値 3.0 (2.0-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.917, p = 0.00$)。

3) 在宅療養をふまえた退院指導の実際についての理解

見学実習前は、中央値 3.0 (2.0-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.899, p = 0.00$)。

4) 退院調整部門・看護師・社会福祉士などの役割についての理解

見学実習前は、中央値 3.0 (2.0-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較

表1 見学実習前後の理解、興味の比較

n = 62

	平均値 (SD)		中央値 (四分位範囲)		z 値	p 値
	前	後	前	後		
実習目標						
問題の抽出と解決に向けた退院支援調整	2.9 (0.7)	3.9 (0.6)	3.0 (2.0-3.0)	4.0 (4.0-4.0)	-6.133	0.00
患者に必要な社会資源の活用	2.9 (0.7)	3.9 (0.7)	3.0 (2.0-3.0)	4.0 (4.0-4.0)	-5.917	0.00
在宅療養をふまえた退院指導の実際	3.0 (0.8)	4.0 (0.5)	3.0 (2.0-4.0)	4.0 (4.0-4.0)	-5.899	0.00
退院調整部門・看護師・社会福祉士などの役割	2.9 (0.8)	4.0 (0.7)	3.0 (2.0-3.0)	4.0 (4.0-4.0)	-5.745	0.00
社会資源 (医療制度・福祉制度・福祉施設・患者会など)	2.9 (0.8)	3.8 (0.6)	3.0 (2.8-3.0)	4.0 (3.0-4.0)	-5.918	0.00
患者の退院支援についての理解						
退院支援のアセスメントの視点	3.2 (0.8)	4.2 (0.7)	3.0 (3.0-4.0)	4.0 (4.0-5.0)	-5.507	0.00
必要なアセスメントの方法	3.2 (0.7)	4.1 (0.6)	3.0 (3.0-4.0)	4.0 (4.0-4.0)	-5.485	0.00
必要な退院支援の方法	3.0 (0.7)	4.0 (0.8)	3.0 (3.0-3.0)	4.0 (4.0-4.0)	-5.735	0.00
地域医療連携室についての理解						
地域医療連携室の活動を実感	2.9 (0.7)	4.4 (0.7)	3.0 (2.0-3.0)	4.0 (4.0-5.0)	-6.225	0.00
地域医療連携室の活動と病棟の看護がつながる	3.1 (0.8)	4.6 (0.6)	3.0 (3.0-4.0)	5.0 (4.0-5.0)	-6.43	0.00
在宅での生活を可能にする支援が具体化	2.9 (0.8)	4.4 (0.7)	3.0 (2.0-3.0)	4.0 (4.0-5.0)	-6.527	0.00
地域医療連携室の看護への興味	3.5 (0.9)	4.0 (0.7)	4.0 (3.0-4.0)	4.0 (4.0-4.0)	-3.983	0.00

すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.745$, $p = 0.00$)。

5) 社会資源 (医療制度・福祉制度・福祉施設・患者会など) についての理解

見学実習前は、中央値 3.0 (2.8-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (3.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.918$, $p = 0.00$)。

3. 患者の退院支援についての理解 (表 1)

1) 退院支援のアセスメントの視点についての理解

見学実習前は、中央値 3.0 (3.0-4.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-5.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.507$, $p = 0.00$)。

2) 必要なアセスメントの方法についての理解

見学実習前は、中央値は 3.0 (3.0-4.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.485$, $p = 0.00$)。

3) 必要な退院支援の方法についての理解

見学実習前は、中央値 3.0 (3.0-3.0)、見学実習後は、中央値 3.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -5.735$, $p = 0.00$)。

4. 地域医療連携室についての理解 (表 1)

1) 地域医療連携室の活動を実感

見学実習前は、中央値 3.0 (2.0-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-5.0) であった。見学実習前後で比較

すると見学実習後が有意に高かった ($z = -6.225$, $p = 0.00$)。

2) 地域医療連携室の活動と病棟の看護がつながる

見学実習前は、中央値 3.0 (3.0-4.0)、見学実習後は、中央値 5.0 (4.0-5.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -6.430$, $p = 0.00$)。

3) 在宅での生活を可能にする支援の具体化

見学実習前は、中央値 3.0 (2.0-3.0)、見学実習後は、中央値 4.0 (4.0-5.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -6.527$, $p = 0.00$)。

5. 地域連携室の看護への興味 (表 1)

見学実習前は、中央値 4.0 (3.0-4.0)、見学実習後は中央値 4.0 (4.0-4.0) であった。見学実習前後で比較すると見学実習後が有意に高かった ($z = -3.983$, $p = 0.00$)。

6. 見学実習の学習効果

「見学実習の学習効果」については、「(とても～まあまあ) 効果的」が 96.8%、中央値 5.0 (4.0-5.0) であった。

7. 臨床の専門家による教育方法について効果的であった点 (表 2)

地域医療連携室の看護師による見学実習について臨床の専門家による教育方法について効果的であった点を自由記述で求め、意味の類似性に基づいて分類した結果、「退院支援について具体的にイメージできた」「担

表2 臨床の専門家による教育方法について効果的であった点

臨床の専門家による教育方法について効果的であった点	
* 退院支援について具体的にイメージできた	
<ul style="list-style-type: none"> ・前方支援、後方支援など詳細を聞くことでイメージがすぐついた ・実際の症例を開けて具体的にイメージできた ・具体的な事例を用いて説明して下さりイメージが持ちやすかった ・具体的な事例を使用されておりイメージしやすかった ・事例を紹介してもらえたのでわかりやすかった ・実際に働いている人にしかわからない患者家族への思いや病棟看護師の思いを知ることができた ・患者さんの生活を支援することについて実際の事例をもとに深く知ることができた（患者の意思尊重や多職種連携について） ・事例による退院支援方法の説明がわかりやすかった ・事例を用いて実際に行われている支援を時系列で知り、わかりやすかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際の患者さんで検討がありわかりやすくイメージしやすかった ・事例を用いて実際にどのような関わりを行ったか紹介していたのでイメージしやすかった ・具体的事例でイメージがわいた ・具体的な事例を紹介していたためわかりやすかった ・事例があり、わかりやすかった ・実際の事例を用いることで退院調整、退院支援の具体的な看護を理解することができた ・事例があることで実際にどんなことを退院支援としてしているかを知り理解することができた ・実際の役割を見て退院支援の実際について学べた点
* 担当している患者の退院支援の方法が具体的にできた	
<ul style="list-style-type: none"> ・退院支援における介入の視点について理解が深まった ・自分の受持事例について支援の方法のきっかけをつかむことができた ・退院を見据えた患者さんを受け持っているため退院支援の計画に参考になった ・自分の受持患者さんを事例に退院調整のアドバイスを頂けた ・事例の検討がとても有意義だった ・今の自分にもできることを知ることができた ・地域医療連携室の機能を復習できたと同時に自身の事例についてどういった支援が必要か何うことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・事例を通して退院支援を考えられた ・患者の退院支援の方向性が明確になった ・慢性期の患者を受け持たせて頂いているの中で、具体的な事例を取り上げて退院調整について知ることができ、学びが深まった ・事例で具体的な支援を開けたので良かった ・具体的な支援について知れた ・私には思いつかなかった支援の方法を聞くことができた
* 地域医療連携室の役割について理解できた	
<ul style="list-style-type: none"> ・病棟看護師との連携、地域のかかりつけ医、往診医、訪問看護師とどのように連携をとっているか実感できた ・慢性実習もしながら、どう連携されているのか疑問を持つことがあったので解消できて良かった ・地域連携室の概要が良くわかった ・地域との連携のためにまず自分が働くであろう病棟看護師として何ができ、どのような視点が必要かを知ることができた ・地域連携室の役割が具体的にみえるようになった ・実際の事例を通して学習を深めることができた ・具体的に事例をおしてどの様なことを行えば良いのかすぐわかった ・退院するのに必要な情報がわかった ・事例を通して学ぶことで実際がわかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・退院支援と退院調整の違いなど聞いたことはあっても説明できなかったことを学習することができた ・病棟と地域連携室では患者のとらえ方+アセスメントの視点がちがうということがわかった点 ・地域との連携について考えることができた ・病棟の実習ではあまり実感することはなかったが今日の実習を通して受持患者さんの今後、転院についてその思いや認識などを把握しようと思った ・地域との連携の実際を事例でわかりやすく学べた ・地域連携室の役割について知ることができた ・地域医療連携室で病棟の看護へつながりが分かった ・実際の活動を知ることができた ・実際に働く看護師からの話が聞けて具体的なことがわかった

担当している患者の退院支援の方法が具体的にできた」
「地域医療連携室の役割について理解できた」が抽出された。

V. 考察

在宅ケア推進に向けた効果的な教育方法の試みとして、成人慢性期看護学実習で学生が担当した患者への退院支援についてアセスメントする学習を取り入れたので、その効果を検討する。

成人慢性期看護学実習地域医療連携室の見学実習の実習目標は、実習後、理解度が高くなっており、学生は担当している患者についての問題の抽出と、その解決に向けた退院支援・調整についてグループで検討する機会を得ることができた。そして、患者に必要な社会資源の活用や在宅療養をふまえた退院指導について、現実的な助言を退院調整看護師から得ることができ、退院調整部門と看護師、社会福祉士などの役割や

社会資源（医療制度・福祉制度・福祉施設・患者会など）について具体的に学べたと考える。

退院支援についても実習後、理解度が高くなっており、実習で担当している患者の退院支援のアセスメントの視点、必要なアセスメントの方法、必要な退院支援の方法について学習する機会となったと考える。また、学生が担当している患者への退院支援についてのグループワークを行ったことで、退院支援のアセスメントの視点やアセスメントの方法、必要な退院支援の方法をグループで考え、専門的な助言を得る機会となり、その後の病棟実習で活かすことができる、実践的なものとなったと考える。

地域医療連携室についても実習後、理解度が高くなっており、見学実習は学生にとって地域医療連携室の活動を実感でき、その活動と病棟の看護につながる機会となり、患者の在宅での生活を可能にするための支援を具体化する機会となったと評価できる。学生は、

地域医療連携室の実際の仕事現場を見学することにより、これから行われるレクチャーとグループワークが実務に近いものだという事を認識することができたと考える。具体的で、実際の事例を用いて検討したことは学生の学習意欲を高める要因となったと考えられる。地域医療連携室看護師長および退院調整看護師からのレクチャーも、医療チームの連携と退院調整について実際の退院支援の事例をもとに、地域医療連携室や病棟看護師の役割、在宅療養に必要な社会資源について具体的に示している。実際の事例を提供することで、地域医療連携室が行っている問題の抽出と解決に向けた退院支援・調整、患者に必要な社会資源を活用することや、在宅療養をふまえた実際の退院指導、退院調整部門・看護師・社会福祉士などの役割分担について、学生は具体的に理解できたのではないかと考える。

地域医療連携室の看護への興味も見学後に高くなっており、地域医療連携室の看護師による見学実習の学習効果についても学生の評価は高かった。病棟看護師の退院支援の課題として、病棟看護師が訪問看護や在宅生活のイメージが付きにくい現状にある⁶⁾ことが指摘されているが、本見学実習により、学生は、在宅での生活を可能にする患者への支援を具体化することができ、地域医療連携室の活動と実習病棟の看護をつなげて考えることができるようになり、地域医療連携室の退院調整の活動を実感することができたと考える。

今回、全ての項目で学生の理解が深まったことが明らかとなり、本見学実習の構成についても評価できると考える。

しかしながら、本調査は実習期間中に調査票を配布し、回収する形で実施しており、バイアスが含まれていることが懸念される。今後は、今回の学びが統合実習にどのように影響していくのか検証していく必要がある。

VI. 結論

在宅ケア推進に向けた効果的な教育方法の試みとして、実習で担当した退院支援事例をアセスメントする学習を取り入れた地域医療連携室の見学実習の学習効果を検討した結果、以下のことが明らかとなった。

1. 実習目標5項目、患者の退院支援について3項目、地域医療連携室について3項目、地域連携室の看護への興味、の全ての項目で見学実習後有意に理解度が上昇した。

2. 見学実習の学習効果について、学生の評価は高かった。

3. 学生は退院支援について具体的にイメージでき、患者の退院支援の方法が具体的にでき、地域医療連携室の役割について理解する機会となった。

以上より、この試みは効果的であったと考えられる。

VII. 引用文献

- 1) 厚生労働省：平成28年(2016)医療施設(動態)調査・病院報告の概況, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/16/dl/gaikyo.pdf> (閲覧日2018年7月23日)
- 2) 堂本 司, 実藤基子(2014):看護過程の紙上患者事例からみた看護学生の退院支援に関するアセスメントの視点, 日本赤十字広島看護大学紀要, 14: 55-64.
- 3) 厚生労働省:地域包括ケアシステム, https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/ (閲覧日2018年9月10日)
- 4) 西崎 未和, 尾崎 章子, 其田 貴美枝他(2015):看護基礎教育における退院支援実習の学習成果, 日本在宅看護学会誌, 3(2):74-83
- 5) 松崎奈々子, 近藤浩子, 堀越政孝他(2015):地域での暮らしを見据えた看護に関する看護系大学4年生の興味・関心, 群馬大学大学院保健学研究科紀要, 36:31-37
- 6) 川嶋 元子, 森 昌美, 松宮 愛他(2015):病棟看護師の退院支援の現状と課題 患者が地域へ安心して戻るために, 聖泉看護学研究, 4:29-38